
二人の博士

米問屋のひ孫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二人の博士

【Nコード】

N0324I

【作者名】

米問屋のひ孫

【あらすじ】

シベリアの隔絶された土地に一人暮らすクジミツチ博士は自分の死期が近いことを悟っていた。そんな中、彼は亡き同僚であるオルガニコフ博士の残した論文から脳内にある全てのデータを他人の脳に移植する方法を知った。彼は恐ろしい計画を実行に移そうとするが……

第一話：年老いた博士

ただっ広い雪原にモミの木がまばらに生えている。そのモミの木は先端の鋭角を灰色の空に突き刺すかのように生えていた。

小鳥の鳴き声は聞こえず、飛んでいる虫や地を這う小動物もいない。そこに広がっているのが一面が白く染まった世界であつた。

身を刺し貫くような寒風が吹きすさび、地面に積もっている雪を巻き上げ、視界を白く濁らせている。遠方はあたかも白い壁が出来ているかのようで全く見通せない。

死の世界のように見えるこの地だが、一つだけ、無粋にもコンクリートの地肌を辺りに晒している建造物があつた。生物の跡はそれだけであつた。

そこに住む男はアルチョム・ミハイロヴィチ・クジミッチ。

もともとはソ連科学アカデミーの会員であり、物理学のとある研究でロモノソフ金メダルをも受賞した秀才だったが、研究のために人里離れたシベリアのこの地に移り住んだのである。

引越した当時は専攻分野は違えど不思議と気の合っていた、生物学者ステパン・エフゲニヴィチ・オルガニコフがいたのだが、十数年前に突然失踪していた。

クジミッチには彼の失踪した理由のたいのところが分かっていた。

オルガニコフの好物はキノコであり、ちょうどここでは短い夏の間にも多くのキノコが一斉に生える。そして、彼は方向音痴だった。彼はキノコ採りに夢中になり森の奥深くに入った揚げ句、帰り道が分からなくなつて遭難したのに違いないのである。

クジミツチはその真つ白の頭をふりながら本棚を漁っていた。

「違う、違う、違う、違う」

違う、と連呼しながら本棚の中身を片っ端から床にぶちまけて行く。床には擦り切れ、色あせた緑色のじゅうたんが敷かれていた。壁の隅には白っぽい綿ぼこりが積もり、投げ落とされる本から風を受けてふわふわと舞い上がり、日の光を反射した。そんな部屋で男が本棚を一心不乱に漁る様子は何か禍々しい雰囲気を感じさせる。

一冊の本から中央部に赤い鎌とハンマーの描かれた一万ルーブル紙幣が飛び出てきた。くたびれた、茶色っぽいその紙幣はひらひらと床に舞い降りた。

しかし男はその紙幣には目もくれない。彼の探している物は同僚オルガニコフの残した論文だった。そして紙幣の上にも本は降ってきた。

オルガニコフが失踪する数日前のことだった。

「同志アルチョム・ミハイロヴィチ、私はなかなかおもしろい研究を完成させたんだが、見てみるかね？」

没になった論文の余白で凄まじい桁数の計算を繰り返していた彼にオルガニコフは突然話しかけた。

しかし、計算に夢中な彼は気付かない。

彼はソ連当局からの依頼でとある物騒極まりない兵器の実用化についての相談を受けていたのである。

その兵器はレールガン。

レールガンと言えば、SF小説なんかには良く出てくる兵器だが、その理由も当然で、レールガンの威力を持つてすれば、装甲などまったく問題にならないのである。例えば戦艦大和だろうがなんだろうが、レールガンの砲弾の一撃で真つ二つにすることだって不可能で

は無い。

もちろん実現にはいつかの問題があった。内部の導体レールの摩擦などもそこに含まれるが、最大の問題は電気を食いすぎる、という点である。

レールガンは電磁誘導で金属体を加速し、その先端に配置された絶縁体を弾丸として発射するというもののだが、実用的に言って、十五キログラムの砲弾を毎分十発ほど発射しようとすれば、弾丸の直径にもよるが、三十から四十メガワットの電力が必要である。

これは大型火力発電所の発電機一つの三分の一ほどの出力であり、おいそれと持ち運び出来るような電源は開発できそうにも無い。もちろん電線を引けば、砲身ぐらいは小型化できるが、そもそも戦場では電線を引いて、などと悠長なことは出来ない。それに電線を切られたりすれば一巻の終わりである。レールガンは内側に二本の導体で出来たレールが通されている単なる筒にすぎなくなるのである。そこで電波で電力を供給するという彼の研究が注目された。そして当時の彼はその研究の真っ最中にいたのであった。

「同志アルチョム・ミハイロヴィチ、私はなかなかおもしろい研究を完成させたんだが、見てみるかね？」

「なんだ、同志ステパン・エフゲニヴィチ。わしは忙しいのだ。後にしてくれたまえ」

むげに断るクジミツチにオルガニコフはなおも食い下がった。電灯の光にはげ頭がてかてかと光る。

「いいや、君。これは世紀の大発見だよ。今見ないと損をするぞ」「ステパン・エフゲニヴィチ。ではこの計算が終わってからにしてもらおうか」

しつこい同僚兼友人に彼は仕方なく、その研究の成果とやらを見せてもらうことにしたのである。

「で、これが今度発表するつもりの論文だが、これは発表してからのお楽しみだ。その前に実験を見せてあげよう」

やたらともったいぶるオルガニコフ博士の態度に彼はいささか不快感を覚えながらも黙っていた。

「ここに私の九官鳥がいる」

「言わんでも分かるさ。わしの目は節穴では無い」

ぶっきらぼうに彼は言い放った。

「そしてこいつはおとつい買ってきた九官鳥のひな鳥だ」

『もしもし、親愛なる同志レオニート・イリイチだ。もう一つ金星勲章を付けたいのだがどうしたら良いだろうか』

突然オルガニコフの九官鳥が叫んだが、二人とも気に留めていない。

鳥かごを二つ、手にぶら下げたオルガニコフの後を彼は付いて行った。行き先は彼専用の研究室である。

雑然とピーカーやビュレット、巨大な位相差顕微鏡が置かれたテーブルの脇に、奇妙なきらきらと光を反射する機械が置いてあった。木目を生かした壁を背景にして、その異様な形が押しつけがましく彼の目に飛び込んできたのである。

腕を組んで見守る彼の目の前でオルガニコフは手早くその機械から引き出した赤銅色の電極板を二羽の九官鳥の頭にそれぞれ二枚ずつあてがい、ヒモで固定した。

異様な雰囲気を感じたためかオルガニコフの九官鳥はますます騒ぎ立てた。

『貴様ら全員シベリア送り！偉大なる同志スターリンは命じる！』
作業は九官鳥の叫び声など意にも介さず進められる。もう一羽は言葉など教え込まれていないので、囁れた声を上げて羽を慌たしくばたつかせているだけである。

このオルガニコフの九官鳥はやたらと共産主義がかったセリフを
はく九官鳥だが仕方ない。二人が暇だった時にふざけて教え込んだ
のである。言うなれば虎の尾を引っ張るような行為ではあるが、ま
だ若かった彼らにはスリルに満ちあふれた勇敢な行為と思えたのだ。
フルシチヨフによるスターリン批判後だったとは言え、スターリ
ンの肅清癖をおちよくったり、フルシチヨフを失脚させたレオニー
ト・イリイチことブレジネフ書記長の勲章マニアっぷをからかった
りすれば、ルビャンカのKGBが管轄する刑務所で頭を撃ち抜かれ
ても文句は言えないのである。

「これではいさつさと。スイッチを入れて三分だ。三分で終わる」
オルガニコフはクジミツチににやにやと笑いかける。クジミツチは
気が短いのか、右足を揺すって床をがたがた言わせている。

「ふん。で、何が起るんだ？」

「まあまあ、ほんの三分」

煮え切らない相手の対応に彼はいらだちを募らせたが仕方ない。こ
こまで待つて見ずにやめると言うのも、逆に気になって後の仕事が
手に付かなくなるだろう。

「んじゃ、よしと。おい、お前喋るんだ」

オルガニコフは自分の九官鳥の鳥かごを天井に引っかけると、そん
なことを言いながら新しく買った九官鳥を突いた。

『もしもし、親愛なる同志レオニート・イリイチだ』

突然その九官鳥が叫んだ。もといた九官鳥と同じ言葉をである。

「ん？ どうなってるんだ？」

「へへん、これで成功した。脳みその中身を数値化した上でコピー
してだな、こいつの脳みそを書き換えたのだよ」

「は？」

彼はあまりにとっぴな友人の発言に納得がいけないと言う顔をした。

もちろんオルガニコフはそれぐらいの反応は織り込み済みである。
「つまりだな、この九官鳥とあの九官鳥は個体は別物だ。しかし、
頭の中は全く同じ物になっているのだよ。つまり、個体は二つだが
個性は一つになったのだ」

オルガニコフは自信に満ちあふれた顔でそう述べた。

そして、彼は失踪した。発表は行われず、またその内容はクジミ
ツチの脳の中で他の記憶であふれた海の中に沈んで行った。

しかし、彼の頭の中から完全に抹消されていたわけでは無かった。
研究は失敗続き、彼は年老いて行き、先も短くなった。焦りはい
よいよ彼の頭に広がったが、その焦りが彼の脳の奥底からこの記憶
をサルベージしたのであった。

相変わらず本を取って投げ、取って投げしていたクジミツチだが、
一冊の黒いノートが分厚い本と本の間から現れた。

彼は期待に目を輝かせながらその本を手に取り、中身を読み始め
た。次第に目が大きく見開かれ、口元が歪んで行った。

「ふふふふ、これだよ、このマニュアルだ。これだ、これだ。これ
さえあれば私は研究を続けられる！」

クジミツチは大声で叫ぶと不気味な笑みを浮かべながらノートを
閉じた。目は異様に光り輝いていた。

しかし、一つだけ問題があった。彼の意識を乗り移らせる人間を
どこに求めるかだ。

第一話：年老いた博士（後書き）

お読み下さっております。空想科学祭参加作品中最悪の駄作かつSF色の薄いものとなる可能性はありますが、もし楽しんでいただければ幸いです。

第二話：博士とマフィア

「しかし、爺さんも生きてたんだねえ」

蛍光灯が煌々と光り、大きなガラス窓からは日光がさんさんとは言ってきた。

窓の向こうには目がチカチカしてきそうなほど色鮮やかな聖ヴァシリイ大聖堂が見える。

少なくともシベリアの雪原の中で暮らしてきたクジミツチの目にとっては、白と青の縦じま模様に塗られたロシア正教会の大聖堂特有のねぎ坊主型ドームや紫と緑のいばを多数ひっつけているねぎ坊主など、その奇怪な色彩は眩しすぎた。

そして、そのけばけらしい聖ヴァシリイ大聖堂の背後には赤で統一された壁に囲まれた、これまた赤が基調の色合いをした建物が広場を囲むように建っている。

これこそがロシアの中樞、クレムリンであった。

「ブルガーコフも変わったな」

「そりゃあ爺さんよ、最後に会ってからもう二十五年は経ってる。そうだ。まだブレジネフが上に居座っていた頃だな。まあこれだけ社会が変わればなあ」

懐かしむように天井を見上げた初老の男にクジミツチは不思議そうに訊ねた。

オーク製らしい、落ち着いた茶色の机の上に、大理石の台がついた木製の電気スタンドが置かれている。その横には銀色に光る高級そうな万年筆が転がっていた。グリップは矢の形をしている。

「しかし、今の状況がさっぱり分からんのだが。モスクワのど真ん中で退廃音楽を聴いている奴はいるし、アメリカで見たことのある

ハンバーガー屋が堂々と営業しているし。どうなったんだ？」

「そりゃあ爺さんや。あんな三十年近く前の代物の、ヴォルガ車に乗ってここまで来た、前時代の化石みたいな爺さんには分からんのかも知れんがね、かの愛すべきソビエト社会主義共和国連邦はすでに無いのだよ。いまはロシア連邦だ、独立国家共同体だ。我が国も資本主義国家となったのさ。しかし、退廃音楽とは懐かしい響きだな。ロックとかポップ音楽をそう言っていた時もあつたっけか。だがな、今のロシアは大統領やそう言った国のトップもロックコンサートに出かけて行っちゃう国になったんだ。もちろん完全に合法的にな」

ブルガーコフは微笑みながらこともなげに言つてのけた。しかしクジミツチにとってはとんでもない話である。

シベリアの奥地で研究している間に、国家そのものが百八十度ぐるりと向かうべき方向を変更してしまつていたのだから。

「……な、なな、なんだとッ！」

クジミツチは間抜けな表情で口を半開きにしてブルガーコフを見つめていたが、やがて事情を飲み込めたのだろう。腰を抜かさんばかりに驚き椅子から転げ落ちてしまった。

ブルガーコフは笑った。クジミツチは腕をがくがくと震わせながらやつとのこと椅子の上にはい上がった。

「そりゃあ、あのソ連が崩壊しないとロック聞いたり、ハンバーガー食ったりは出来ないだろうさ。しかしだな、その煽りを食って『優秀極まる』ノーマンクラツラだった私は失職。まあ頭を生かしてこの仕事をしているがね。収入や地位と言う点では昔とあまり変わっていない。しかしだな、ついでに言うによっぽど政権批判をテレビや新聞で繰り広げない限り、身は安全だぞ。ラーゲリ（強制収容所）は無くなったしな」

ノーマンクラツラ。名簿とかリストと言つた意味を持つこの言

葉は何やら面白い、コミカルな響きだが、その実態は愉快的な物では無い。

「共産貴族」「赤い貴族」とも揶揄されるこの階級は全人民が平等との建前を持つソ連において絶大な特権を持っていた。

例えば一般の人間が肉を買いに肉屋で行列を作っていたとしても、彼らは「エリート党員専用肉屋」で優先的に肉を買えたり、一般人は納車が十年待ちの車を順番待ち無しで買えたりと様々な恩恵を受けていたのであった。

しかしソ連は崩壊してしまい、ノメンクラツラ達は所属していた「党」を失った。

ただ党が無くなったとは言え、彼らが仕事上知り得た知識やコネが失われたわけでは無かった。

倫理観などはこれっぽっちとも持っていないくとも頭脳だけは天下一品だった彼らは、ある者は会社を興しグレーゾーンを突き進んで荒稼ぎし、またある者はグレーゾーンどころかブラックゾーン??つまり犯罪行為だが??に突入して行った。前者はオリガルヒ??新興財閥とも言う??になり、後者はロシアン・マフィアとなった。そして前にいるブルガーコフは後者だった。

もともとは国防工業省のノメンクラツラだった彼はソ連崩壊で失職した。しかし、国防工業省が扱う物は小火器、戦車、重砲など。その内、小火器と言えばライフルや機関銃である。ちょうどマフィアにはうってつけのブツを扱う省庁に所属していたのである。

彼は小火器の横流しやその他の便宜をある組織に与え、その幹部になっていた

ちなみに、ソ連においては様々な省庁が存在していたが、なかなか一筋縄では行かない名称で通っていた。

「造船省」が空母や巡洋艦を扱ったり、「航空工業省」が戦闘機や爆撃機などの軍用機を扱うのはまだ理解できる。しかし「機械制作

省」が砲弾や弾薬、「中型機械製作省」が核弾頭や原子炉など核関連のものを取り扱っているというのはあまり理解できる人はいないだろう。明らかに原子炉は「中型機械」と呼ぶには問題があり過ぎる。そして最も名称と内実があっていないのが「一般機械製作省」で、扱っているのは弾道ミサイルであった。弾道ミサイルのどこが「一般機械」なのかはさっぱり分からないが、ともかくそうになっていたのであった。

「ふーん、それで爺さん、若くて金持ちで、かつ身寄りのいなくて交友関係の少ない男を一人欲しいって？　なんだ、爺さんアレ、だったのか？　そうとは見えないが……」

「違うわい。だいたいソレなら金持ちなんて条件はつけんだろう」
頼みを聞くとにやにやと笑い始めたブルガーコフにクジミツチは不服そうに言った。

しかし、勘違いされても仕方ない。

彼の目的は若い肉体にあの機械を使って自分を乗り移らせること。そのためには、まず若い男が必要である。

その次に、すでに彼の道楽と化してしまっているレールガンの研究にはさらに資金がいるはずであった。その目的を満たすのに最善の方法は金持ちの男に乗り移ってしまえば良いのである。

特に、身寄りが無く、交友関係の少ない人間なら人格が変わった所で気付かれる確率は少ないだろう。

にやにやと笑ってこちらを見つめてくる失礼な相手にクジミツチはいたく腹を立てた。

「だいたい金は渡したのだからごちゃごちゃ言わずに言うことを聞け」

彼は相手の目の前にルーブル紙幣の束を音高くどんと置いた。緑

色の輪ゴムで止められた新品の紙幣である。

「持ってくる物は持ってきたんだな」

ブルガーコフは疑るような目つきでクジミッチをしげしげと見つめると机の上の呼び鈴をならす。すぐに若い男が機械を持って入ってきた。

「それをさつさと数えろ」

ぶつきらばうにブルガーコフは命令する。男が機械に紙幣を入れるとモーターの唸る音がして、数字がディスプレイに表れた。

「よろしい、と」

ブルガーコフはつぶやくとしっしつと男を追い払った。彼はクジミッチの方を向いた。

「ああ、分かった、分かったよ爺さん。美少年でも何でも調達してやつからさ。それにしてもよく爺さんみたいな化石が銀行で金なんか下ろせたな。あ、獲物があればその電話にかけるからな。使い方は教えた通りだ」

ブルガーコフは分かった分かったと言う感じに手をひらひらと振りながら、大笑いをして見せた。そこはかことなく貫録と言った物が漂っている。

クジミッチはしばしの間手渡された何の変哲も無い折り畳み式の携帯電話を目をしばたかせながら見つめていたが、踵を返すと部屋を出て行った。そしてブルガーコフは電話の受話器を取る。

三日後のことだった。モスクワの地下鉄の駅の入り口から出て来たクジミッチの元に一本の電話がかかってきた。

彼は慌てて携帯電話を古くさいデザインの上着の胸ポケットから取り出す。パカッと片手で携帯電話を開くと、と言いたい所だが、両手でこねくりまわして、やっとのことで苦労して開いた。

「もしもし」

しかし、返事は無くただただ電話はうるさく鳴り続けている。

「もしもしッ！」

クジミツチは絶叫した。しかしまだ電話はしつこく鳴り続けている。真っ赤に染めた髪の毛をつんつんと立てた若者が歩み寄ってきた。頭の後ろで手を組み、口にはタバコをくわえている。

「おいおい、まったくこれだからじつちゃんはよお。このボタン押せよ、これ」

若者はボタンを差し示し、「チャオ！」などと調子よく声をかけて去って行った。ロックのような音楽を口ずさんでいた。クジミツチが慌てて若者の差したボタンを押すとブルガーコフの声が彼の耳に入ってきた。

「おお、やっとか。爺さん、いつまで待たせるつもりだったんだ？ まあいい、今すぐオフィスに来てくれ。ご希望の品を入荷したかな。しかし今回は出血大サービス。送料無料で郵送サービスもあるのだな」

「……それなら教えた住所に送ってくれるのか？」

「もちろん」

「それなら郵送で頼む」

とんでもない話だがこれこそがロシアン・マフィアの実力であった。

元高級官僚であるマフィアたちは警察や軍とのコネを最大限生かしていた。そのため、非合法行為も捜査の網の目を抜けてやすやすと行えるのであった。

クジミツチは古色蒼然たるヴォルガ車に乗りこみ、キーを回した。車は奇妙に震え、エンジンがかからない。

彼は舌打ちをすると車から降りてクランクを勢い良く回した。

一発大きな音がしたかと思うとエンジンは騒々しい音を立てながら始動した。

彼はがくがくと震える車に乗り込み、扉を勢い良く閉めると騒々しいエンジン音をけたたましく鳴らしながらモスクワの外れにある、新しく借りたぼろぼろの一軒家へと向かった。

最終話：二人の博士

ほこりつぱい部屋の中に二人の男がいる。

一人は老爺。クジミツチである。

そしてもう一人は金髪で、鼻筋のすらりと通った顔のしている若い男。南京虫でも湧いていそうなほど埃っぽいベッドの上に寝かせられている。

この若い男こそがブルガーコフが調達し、郵送サービスとやらで届けてくれた人物である。

もつとも、郵送サービスと言っても宅配便のわけが無い。真つ赤に髪の毛を染め、鼻にピアスをした目つきの異様な若者がゴミ袋かなにかを投げ出すかのようにおいて行つたのであつた。

若い男はクロロホルムが何かを嗅がされたらしくぴくりとも動かない。かすかに聞こえる鼻息とゆっくり上下する胸のみがその男の生きているということを伝えている。

オレンジ色のスポンジが革の破れ目からはみ出ている、ぼろぼろの黒い革張りのソファアに腰掛け、前で眠らされている男についての情報が書かれたレポートを読んでいた。パスポートの写しや戸籍のコピーまでもがはられている。

前にいる男は名前をフォードル・イリイチ・メニューインと言い、株を右へ、左へと短時間に転がす方法??デイトレードとも言づらいが??荒稼ぎしていたらしい。それに身寄りはい人もいないし、友人もいないらしい。

確かに彼の要求通りの人物をブルガーコフは調達してくれたのであつた。

未だにばりばりの共産主義者である彼には頭脳労働も肉体労働も伴わない稼ぎに嫌悪感を抱いているらしかった。彼にとっては二十代の肉体にも頭脳にも何らの欠陥が無い者が社会に対するまともな

働きをしないことは罪惡であつたのだ。

彼は「天誅だ」と言わんばかりに何度か一人でうなずくと眠っている男の頭に電極を取り付けた。自分の頭にも同じ物を付ける。

少しだけクジミツチの顔は恐怖に引きつり、震える指は何度かスイツチの前を逡巡していたが、えいやとばかりにボタンを押し込んだ。

メーターの針が暫くふよふよと左右に振れ、止まる。「完了」と書かれたランプがぱつと光って消えた。

あつけない終わりだった。少し物足りないような表情のクジミツチは電極を外すとメニューインを見つめる。

成功したにせよ失敗したにせよ、こいつが目覚めない限り分らん。

そう考えると、物置に閉じこめ、しっかりと鍵をかけると夕暮れの赤い日の中を再びモスクワの町へと出かけて行った。

次の日、南京虫まみれっぽく見えるベッドの上にメニューインは転がされていた。

目は閉じられていない。まぶたがぱたとせわしく上下する。クジミツチは期待に充ち満ちた表情で訊ねた。

「おい、お前は？」

しばらく、頭がぼんやりとしているのか、どろんとした視線を天井に送っていたメニューインだったが、十分ほどするとやっとのとでむくりと起き上がる、大笑いした。

「大成功だ。クジミツチは若返った」

嬉々としてメニューインはそう言うが、そうは言ってもクジミツチは半信半疑だ。一応自分しか知らないであろう事を訪ねる。万が

「のことを期す、と言った所であろうか。」

「私が所属していたコムソモール（ソビエト共産党の青年組織）の団長は？」

「フョードル・ドミトリエヴィチ・プレトニョフ」

メニューインは薄笑いを浮かべている。クジミツチは内心、正解が聞けてうれしかったのだが、そんなことはおくびにも出さない。まだ顔をしかめたまま次の問いへと移る。

「うぬ、ではアパートのとなりにいた親切だったおばさんの名前は？」

「マリア・ウラジーミロヴナ・マレンコワ」

正解を一瞬で出してくる。うれしさ半分、驚き半分と言った表情で汚らしいベッドに座っている相手の顔を穴が空くほど見つめるクジミツチの目に笑いをこらえているメニューインの表情が映った。クジミツチも笑いたい所だったのだが、元はと言えば見知らぬ若者だったメニューインの笑い顔に、彼は馬鹿にされたような感覚を覚えた。

「なぜ笑う？」

「なぜって？ 自分で自分を尋問する奴だとは思わなくな、わしともあろうものが」

「それなら??」

ついに喜色を浮かべたクジミツチにメニューインが言う。

「くだい。成功だ」

メニューイン、いや、若返ったクジミツチはベッドの上から降りると自分の体をしげしげと見回した。

「我ながらこれはすごい！ 完全に若返ったのか！」

クジミツチとメニューインは抱きあって背中を互いに叩いた。

予想していたことだとは言えども、あまりのことに床に積もっている埃を舞い上げながら小躍りしている二人だったが、クジミツチはふと気付いた。

確かにクジミツチの意識はメニューインに移植されている。しかし、だからといってクジミツチそのものとは限らないのでは無かるうか。

しかし彼はその考えを捨てた。自分と同じ記憶と性格を持った相手ならそれは自分とほとんど同じである。

何の問題があるうか。

取りあえず二人はウォッカで祝杯を上げた。が、クジミツチの違和感が増すばかりである。

じつとメニューインを観察してみる。

確かに顔や体つきは全く違うが、ささいな癖は全く同じである。ボルシチをスプーンですくい、スプーンに黒パンをのせて食べる点。右頬にあるほくろを右手で時々つまむ点。手の甲に生えている産毛を引っこ抜こうとする点。

それは同じなのだが、クジミツチにとってはどうも別人に思えて仕方ない。

顔や体つきと言う点は勿論なのだが、どうも別の所からそう言った印象を受けているような感覚であった。

とりあえず祝杯を上げ終わった二人はコンゴのことについて相談し始める。

しかし、「ハンサムに若返ったし金もあるしで女の子にモテモテ」などとばら色の未来についてぶち上げるメニューインの様子を見て、やっとクジミツチの違和感が明らかになったのであった。

クジミツチは古い先短い身だが、メニューインはあと四十年以上は確実に生きられそうな前途有望な若者である。

確かに、クジミツチは死にたくないがために若いメニューインに「自分の脳みその中身」を移植した。ただし、その時点で、メニューインの中のクジミツチともとのクジミツチは別物になってしまっていたのである。

つまり、メニューインの中の方は後々四十年でも五十年でも生き延びるかもしれないが、クジミッチ自身の寿命は後一年あるか無いかなのである。メニューインはクジミッチが若返ったのでは無く、クジミッチの後継ぎにしかすぎないのであった。

しかし、そもそもが同じ思考回路、それも比喩的表現では無い全く同一のそれを持ってしまったメニューインは突然黙り込んだクジミッチが内心で何を考えたか悟ったらしい。

「おっと、わしがわしの若返った人物では無く、わしの後継ぎなどと考えたんだろう？」

「わしが多すぎて分からん。分かるように言え」

メニューインは鼻で笑った。

「説明せんだって分かるだろうに。しかしお前も間違えたな。お前もわしに移植した時に自殺すれば余計なことを考えずにすんだのじゃないのか？ え？」

テーブルにひじを突き、組んだ両手にあごを置いたメニューインが笑う。

「しかし、安心しろ。わしは体こそメニューインとかいう奴だが、中身はれっきとしたクジミッチだ。アルチョム・ミハイロヴィチ・クジミッチだ。物理学者でソ連科学アカデミーの会員、ロモノソフ金メダル受章の。まあ、この顔でそう言っても公に通用するかと言えはしないと思うがね」

愉快そうにくくと笑うメニューインだったがクジミッチは確信した。

こいつはわしではない。メニューインだ。

無性に腹が立った彼は食卓のナイフを掴んだ。

こうなれば、こいつを始末して別の奴でやりなおそう。その時に

自殺すれば何ら問題あるまい。

いささか、と言うよりはだいぶ狂った論理だったが興奮状態のクジミツチにはその奇妙さが分らない。

しかし、ナイフを掴んだ時点で次の行動は悟られていたようだ。

「おっと、あばよ、わし」

メニューインは机をクジミツチの方に蹴倒すとオルガニコフの機械をひったくり、玄関の扉を開けて駆け出して行った。年を老いたクジミツチには追いつけるはずも無い。

庭に飛び出し、膝に手を置いて肩で息をするクジミツチを尻目にガレージからヴォルガ車が走り去って行った。

メニューインというか、新クジミツチというか、とにかく彼の新しい生活が始まり、クジミツチもしくは旧クジミツチの終わりの始まりであった。

最終話：二人の博士（後書き）

なんだかファースト超劣化版みたいな物になってしまいました。どうも申し訳ありません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0324i/>

二人の博士

2010年10月8日15時33分発行